

内側から見た JNTO のイストワール④

石井昭夫（元 JNTO 理事、
元立教大学観光学部教授）

堀木副会長の欧州視察旅行に随行

本連載②で触れたとおり日本コンベンション・ビューローに出向中の 1965（昭和 40）年 10 月 27 日、突然本部に呼び出され、11 月 7 日出発予定の堀木副会長の欧州出張に随行できるかと打診されました。

堀木副会長は、オリンピック終了直後の 1964 年 11 月、アジアと豪州の事務所を回り、EATA 設立の根回しをされました。この視察の随行は西川脩事業部調査役でした。次いで 1965 年 6 月に在北米の各事務所を視察し、各地で要人と面談したほか、ニューヨーク事務所長（福永正美→多賀谷吉夫）とトロント事務所長（川幡千春→佐藤智三郎）の交替披露パーティに出席されました。米州には生駒博俊人事課長が随行しました。そして最後の欧州事務所の視察（1965 年 11 月）に、思いもかけず私がお供をすることになったのでした。

若いのを連れていく

ヨーロッパ視察に随行予定だった TIC 羽田案内所長の酒井常太郎さんが病をえられ、ぎりぎりになって代わりを立てることになった際、堀木さんが若いのを連れていくと言われたのだそうです。丸ビルにあった堀木事務所に連れていかれ、「お前秘書たるものが何か知っておるか」「知りません」「それでもついてくるか」「連れて行っていただけるなら一所懸命務めます」といったやりとりがあって、翌日から無我夢中で渡航準備を始めました。準備期間はわずか 10 日です。パスポートとビザの取得は特別手配で大至急総務部にやってもらい、

予防接種をし、外貨申請は自分で日銀に行って手続きをしたことを記憶しています。スーツケースはロンドン事務所から帰任してまもない渡辺幸雄さんが貸してくれました。歴史書や文学などでヨーロッパの一般的知識は持っていたものの、海外旅行に必要な知識は皆無でしたから、JTB の「外国旅行案内」をむさぼり読み、仕事を通じて知り合った JAL や JTB の方々に事こまかに教えてもらい、11 月 7 日羽田を出発しました。

直前に洗足のご自宅に出向いて奥様にお会いし、気楽に行ってらっしゃいと笑顔で言われてほっとしたことを思い出します。

目まぐるしい旅行日程

海外航空旅行は庶民には夢のような時代で、外国に行くのはもちろん、飛行機に乗るのも初めての私が副会長のお供として 3 週間ヨーロッパ各都市を巡ることになりました。当時の日記に、欧州諸都市を巡る旅の発見と感動の日々を綴っています。

1965 年 11 月 7 日（日）10：30 発、南回りの AF195 便でローマに向かい、途中で香港、プノンペン、バンコク、ニューデリー、テヘラン、テルアビブに寄港し、その都度空港で待機しつつ同一機で直行するという強行軍でした。ヨーロッパ到着後はローマ（2 泊）、マドリード（2 泊）、ロンドン（3 泊）、ジュネーブ（3 泊）、フランクフルト（2 泊）、ベルリン（1 泊）、パリ（4 泊）、ハンブルグ（1 泊）という行程で、11 月 26 日（金）15：50 発 JL412 便でアンカレジ経由帰国しました。

訪問各国で観光行政のトップと面談し、駐在日本大使と公式、非公式（会食など）に懇談しました。日本航空や国鉄（当時）、

JTB の現地代表との面談も積極的ななされました。

この間ジュネーブで事務所開設披露パーティに出席し、パリでは欧州事務所長会議を主催したほか、所長交代披露パーティ（坂本祐一→増岡廣行）に列席されました。堀木さんの出張に観光的要素は少なかったのですが、それでも在外公館の方や JNTO 事務所の案内であちこちを訪れました。その中で、ケンブリッジ大学とハイデルベルク大学訪問は堀木さんの希望でしたが、学生気分の抜けきっていない私にとって、この二つの大学訪問は夢を見ているようでした。「歴史のヨーロッパ」だけでなく、現在のヨーロッパをも視察地とされました。ローマでは新開発地（エウル地区）と 1960 年オリンピック大会のメインスタジアムを訪れ、ジュネーブでは同年 7 月に開通したばかりのモンブラン・トンネルをクルマイユールまで往復しました。ベルリンでは壁（1961 年に建設）を超えようとして射殺された人々に捧げられた花束や、ケネディ米大統領が演説した記念の場所（その 5 カ月後にダラスで暗殺）に瞑目し、特別の定期バス・ツアーで雪の東ベルリンを訪問しました。ポイント・チャーリーで東ドイツの兵隊が検問のために銃を構えてバスに乗り込んできたとき、同乗していた客の米兵の顔がこわばったのを覚えています。

この時からおよそ 30 年後、奇しくもベルリンの壁が撤去（国境の廃止）された直後の 1990 年 10 月、ハンブルグで開催された ASTA 第 60 回世界観光会議に展示参加した際、私は鉄道でベルリンを訪れ、東ベルリン地区を再訪して堀木さんのお供で訪れた昔を偲びました。

旅行期間中、公的・私的時間を通じて懸

命にお世話をさせて頂いたのですが、戦前とはいえ、堀木さんは昭和 4～6 年の 2 年間、研究員としてアメリカとドイツに滞在された経験があり、他方私は外国を知らず、世間も知らずで、随所でヘマをしました。雷オヤジの異名もある方でしたが、若造の失敗にはことのほか寛容で、思いやりのある素晴らしい指導者でした。

観光行政トップとの面談：欧州の観光行政と対外観光宣伝の現状について

オリンピック大会を成功裏に開催した日本の観光行政の代表として訪欧された堀木さんは、各国の観光行政トップに歓迎され、友好的に懇談が行われました、全体として堀木さんが話題にされたのは、それぞれの国における、1）観光行政の重要度、2）対外観光宣伝における官と民の協力関係、3）観光資源の保護、4）観光分野における新しい施策、などでした。

訪問順に、ローマでイタリア政府観光局 ENIT の A. プレモリ会長、マドリードでアレスパゴチャガ情報省観光局長、ロンドンで英国旅行協会リコリッシュ理事長、ブラッセルで A. オーロー観光庁長官（IUOTO 会長）、パリで観光庁 M. プラン次長、フランクフルトではドイツ政府観光局キテル副会長らと面談し、意見交換しました。

イタリアでは、古都保存と文化財保護に係ることが話題となったほか、観光関係従業員のホスピタリティ向上のために、外客に点数札を配って親切だった従業員にこれを渡してもらい、多くもらった人を表彰するという事業に興味を惹かれました。

スペインでは、国際観光は外貨稼ぎ頭の重要産業である、為替レートが安く物価

が安いのが利点だが、ホテルの統一料金を設定している。コマーシャルベースで採算が合わない観光開発適地では、国家が宿泊施設を設けて経営している（アルベルガス、パラドーレス）、観光局の発言権はかなり強いが、インバウンドのみで国民のための観光行政は行っていない、など。

ロンドンでは滞在がウィークエンドになり、出発日の月曜日午前中に英国旅行協会を往訪しましたが、ここだけ私は別行動をとり、ロンドン事務所長ほかが随行し、記録が手元にありません。英国のナショナルトラストの仕組みなどについて、とくに情報を求められたのだったと思います。

フランス観光庁は、行政官庁であると同時に観光宣伝機関でもあり、観光宣伝印刷物等も作成している、数年前から5か年計画で海浜リゾートやウィンタースポーツ・リゾートを整備している、従来の一般観光客の他、産業観光や会議参加客の誘致もやっている。ホテルの格付けをし、低廉な価格のホテルが充実するよう助成している。文化観光資源の保護は文化省がやっている所以観光庁はかかわっていない…。

ベルギーでは、IUOTO 会長に選出されたアルチュール・オーロー観光長官との面談で、東アジア観光協会（EATA）の設立を準備中であることを告げ、共同宣伝の留意点が話題となりました。また、1967 年の IUOTO 東京総会についての希望やアドバイスを堀木さんが求められました。

ドイツ中央観光連盟の W.A.キテル理事長との面談では、むしろキテル氏の方が質問する側に回り、日本全国の観光案内をする総合観光案内所（TIC）のこと、国レベルの国際会議等誘致を目的とするコンベンション・ビューローの設立などについて質

問を受けました。

パリでの欧州事務所長会議

堀木副会長来欧に合わせ、パリで欧州事務所長会議が開催されました。見角修二ロンドン所長、坂本祐一パリ所長（および後任の増岡廣行氏）、人見敏正フランクフルト所長、住田俊一ジュネーブ所長の他、国鉄パリ事務所の五十嵐勇氏と JTB パリ事務所長の和田嘉男氏がオブザーバー参加されました。内容を紹介するスペースはありませんが、世界でも海外観光宣伝という事業が始まって間もないころのことで、運輸本省の課長クラスの4所長が海外の現場で直面する様々な戸惑いや疑問を投げかけ、注文や提案を率直に副会長にぶつけるさまは、いずれ自分も直面する問題と意識するがゆえに、懸命に耳を傾け、内容を筆記しました。なかでも、赴任に当たってこれといった業務研修も受けず、本部から基本的指針が何も示されないまま各事務所が手探りでやっているが、本部が基本的な方針を示し、事務所はそれに沿って活動するべきではないかとの強い要請がありました。A4 版罫紙 27 ページ分の会議でのやり取りが残っており、今読み返して感無量です。

在外公館との協力体制

副会長の欧州視察のもう一つの目的は在外公館との協力関係を築くことでした。観光は運輸省だけでの問題にあらず、ほぼ全部の省にまたがっているというのが持論の堀木さんは、とくに在外公館との緊密な協力が不可欠との信念から各大使との面談で積極的に意見交換されました。在イタリア与謝野秀大使、在スペイン関守三郎大使、在英国島重信大使、在フランス佐藤正二公使、在ジュネーブ国連日本政府代表部青木

盛夫大使といった方々です。

外務本省から国際観光に関する訓令は何も来ていない、外務省の広報は「近代日本」が中心だから、JNTOとは補完関係にあり、自然の美や伝統文化を紹介する観光映画や印刷物などは重宝している。たとえば、ビザをもらいに来た人には JNTO のパンフレットをはさんで渡している、JNTO の映画は常時 3 分の 1 を貸し出し中である（イタリア）など、出先どうしの協力関係は良好であるとのことでした。

欧州事務所視察の副会長のお土産は？

観光先進地域であり、言語や文化の違う欧州諸国の経験を知ることは堀木さんにとっても刺激が多かったと思います。アジア地区の視察のあとに EATA を残されましたが、欧州事務所視察でもいくつかの新しい施策に取り組みました。欧州視察から発想されたであろう事項をいくつか記してみます。①イタリアのホスピタリティ向上のための施策は、翌 1966 年 8 月の観光週間で早速 JNTO 主催で同趣旨の「ありがとうチェック運動」として実施し、国際観光年（1967 年）と 1968 年の 3 年間実施しました。②観光宣伝の基本方針の策定と年度重点施策の作成、③事務所所在国以外の国での宣伝のための宣伝嘱託員制度の見直し（ローマとブラッセルの宣伝嘱託員と面談）、④本部に全事務所長を集める海外事務所長会議と地域事務所長会議開催の定例化、⑤観光資源保護財団（日本ナショナルトラスト）の設立、などでしょうか。

「若いのを連れていく」というひと言の僥倖

貴賓待遇の堀木副会長の秘書役として欧州諸国を飛び回り、世界の観光行政のトップや在外公館の方々との面談に同席し、

書記を務める機会を得たことは、私にとって信じがたい幸運でした。新しい知見を精一杯吸収し、胸いっぱい雰囲気を楽しんだだけでなく、国際旅行の実際をつぶさに体験できました。通貨や言葉や文化の違う欧州諸国を日替わりのように巡り、通貨交換と物の値段を事細かに記録し、チップや旅行に付随するあれこれの知識もたっぷり吸収しました。毎回異なる国際線航空会社の飛行機に乗り、富裕階層向けホテルとなっていたヒルトンホテル・チェーン（ローマ、マドリッド、ベルリン）をはじめ、ロンドンのグロブナー・ハウス、パリのジョージ五世ホテル、ジュネーブのホテル・リシュモン、フランクフルター・ホフなど超一流ホテルに宿泊し、二度と得られない経験をさせてもらいました。

想定外だったのは、堀木さんとの二人だけの会話の面白さでした。堀木さんは厚生大臣などの要職を歴任された自民党の重鎮だった方だし、私はその他大勢の一人とはいえ、60 年安保闘争では連日全学連の国会前のデモに参加していた人間です。

JNTO の組織や事業に係ることだけでなく、堀木さんは「若いもん」の考え方を知らうとされ、私も遠慮なく私見を述べました。佐藤栄作氏を大阪鉄道局に移動させたために彼が追放を免れた話もこの時伺いました（「らくじゃねえよ」にあります）。堀木さんに JNTO に来ていただけてよかったと言いますと、本当は渋沢敬三のような人が良かったのだが…と言われました。

JNTO に労働組合をつくりたいですが反対されますかと尋ねた時、オレは中央労働委員会仕事をしたこともある、労働組合結成に反対などするものか、といわれたことを懐かしく思い出します。